屋外でソープる上巻

さらに　もう一本！

ハーレム王への道

も同時収録！

R18

チチチチッ

チュン。。。

チュン。。。

（はぁ…どうしよう……）

（あと二週間しかないのに…）

（まだ何も決まってないよ……）

（…結城くん……）

（何をあげたら喜んでくれるんだろ……）

ガラッ

「一番乗り～！」

『！』

「あれ～？
残念…　二番目か～…」

「おはよう　春菜～♪」

「お　おはよう　ララさん…」

ガラ…ッ

「絶賛トキメキ恋愛中の
春菜　おっはよ～！」

「…っ！」

「未央…っ
里紗っ！」

「おーっす♡
ララちぃ」

「おっはー♪」

「おはよ～♪」

「あ　ララさん…！」

「おや…？」

「あれあれー？」

「な　何…？」

「なるほど
なるほど…」

じろ

じろ

「な…
何なの…？」

「ふむ
ふむ…」

「？」

「もうすぐ愛しの結城くんのお誕生日…」

「今年こそはプレゼントを渡したい……」

「…な……っ」

「でも 何をわたせばいいのかわからないの…」

「春菜 困っちゃう～…っ♥」

「…な…っ」

「え…っ！」

「…え…っ」

コホン

「っていう顔してるわね…」

「とっ と とうしてわかったのーっ！」

「ありゃ 当たってた？」

「へー プレゼント攻撃ねー」

（わ～ん 私のバカ～っ！）

「……」

「……」

「う うん……」

「春菜 リトにプレゼントあげたいんだね…？」

「！」

「きゃー ララちぃと春菜の恋のバトル勃発よーっ！」

「これから女同士の激しい歪み合いが始まるのねっ！」

「私がリトの好きな物教えてあげるよ♪」

「え…」

「ありゃ 敵に情報を与えるとは…」

「ララちぃ 余裕だねー」

『はいっ
『これがリトの欲しい物だよっ♪』」
キラ
キラ

「リトはねー
お花が大好きなんだ」
「綺麗……」
「ひゃー
金の花？凄っ」
「でもさー　これ
地球の花じゃないよね？」
ララの発明品
立体映像君

「ぴんぽ～ん♪
実はコレ　宇宙一綺麗な花で
『黄金華（おうごんばな）』っていうんだよー」
「…黄金華……
素敵なお花……」
「ちなみにこれって
売ってるの？」
「もっちろん♪」
「え～と…　地球の値段に
換算すると…」

『ざっと　50万円ぐらいかな」
「…っ！」
「なぬ…っ！」
「ごじゅ……っ」

「春菜（はるな）　諦めよう…」
ポン
「う…」
「地球の花の方が
馴染みがあっていいと思うよ…」
「えへへー　大丈夫ー
私がモモに頼んで
貰ってきてあげるよ♪」

「それじゃあ
早速ー」
ピピ
『あ　待って
ララさん…っ！』

「…？」

「春菜（はるな）……？」

「あ　あのね…
ララさんの気持ちは
とても嬉しいの…」

「でも……」

「そこまでララさんに
甘えられないよ…」

「えー　どうしてー？」

「大切な人への贈り物だから…
その…私一人で何とかしなきゃ…
…いけないかなって…」

「そっ　それにね…」

「結城（ゆうき）くんに
伝えようと思うの…」

「私の気持ち…」

「だからね　そのお花…」

「アルバイトして　お金貯めて…
いつか結城くんにプレゼントしたい…」

「お誕生日には…
間に合わなくなっちゃうけど…」

『…春菜（はるな）……』

「ララさま」

「ペケ」

「わたくし　先程の春菜さまの
お言葉にいたく感動いたしました…」

「ここは僭越ながら　わたくしが
ララさまの代役を務めさせていただきます」

「わたくしのハイテクネットワークを
駆使いたしまして」

「2週間以内に50万円相当の
報酬が見込めるお仕事を探してご覧にみせましょう」

「2週間で50万！
ホントにそんな仕事
みつけられるの？」

「楽勝です」

「さっすがペケ！」

「よかったね　春菜」

「うん！」

「ありがとう　ララさん」

「いやいや」

「ありがとう　ペケさん」

「いえいえ」

「では　リサーチの結果は
のちほどご報告いたします…」

「あ…あの…ララさん…？」
「なぁに春菜～♪」
「うんー！そうだよー♪」
プルルル♥
「アルバイトの紹介してくれるんだよね…？」

「どうして
お風呂に入るの…？」

ペタッ

「それはもちろん
特訓のためだよ！」

「…特訓……？」

「って　私も
何するのか
よく分かってないんだけどね…」

「コホン…
ここからはわたくしが
説明いたします」

「ぺケ　お願い」

「はぁ……」

「それでは　わたくしの
リサーチ結果をご報告
いたします」

「短時間で高報酬が望める
女性のお仕事ですが…」

「ありとあらゆる
職業を調べあげました所
その条件に該当したお仕事が…」

「う…うん…」
どき…　どき…

「ひとつだけ
みつかりました」

ほー…

（よかったぁ…）

「そのお仕事とは
ズバリ…」

「風俗嬢ですっ！」

「…ふうぞく……」

「？……？」

「やっぱり春菜もわからないよね？」

「う…うん…」

「ここは　私の発明品の出番だね？」

「まかせてっ♪」

プルン

「メカは私でプログラムはペケにお願いしたんだ～♪」

ガサゴソ

「すご～い そんな事もできるんだ」

「じゃ～ん！ 万能アイテム『これであなたも風俗嬢』カチューシャと」

「『擬似擬似ちんぽくん♡』だよ！」（リトのモノ参考）

『ちん…』

『…え…？』

（私の聞き間違いだよね……？）

「え…え～と…そ… それ…はどうやって使うの…？」

「おちんちんと同じ使い方だよー♡」

「えへへ～ リトのおちんちんそのまんまコピーしたんだ～♡」

『ゆ…結城くんのおち……っ！』

「コレは私がつけるやつで～」

「春菜のはこっちねっ♪」

「え……っ」

「……」

（カチューシャ……？）

ウィィィン……

ピコーン

「風俗嬢レクチャーモード起動します…」

「へ……？」

「神経回路につなげます」

「え…え……っ？」

カトトトト

「な 何 何～？」

「接続完了…続いて男性器探索モードへ移ります」

「春菜の方は準備万端だね♪」

「よ～し 私もいくよ～♪」

ギュッ

「よっと…」

ビクッ

「あ……♡」

クッ

チチ

「♡……ん」

「ん……♥」
ビクッ
ニチ
ニチュ
「…あぁ……♥」
「な…なかなか…ん♥」ビクン
「…は…入らない…よ…」

「あぁ…ん…っ♥」
ビクッ
「あ…っ♥」
「リ…リトの…あっ♥
お…大きいよぉ……♥」
ヒクン
ビクッ

「も…もう少し……
ほぐせば……んっ♥
は…入りそう…♥」
「あ…っ♥」
ビクッ♥
ビクン♥
「あ…っ♥」
「あぁ…っ♥
は…入ってく……っ♥」
「お…おくに…入ってくよぉ……♥」

「あぁ……♥」
ビク
ハァ♥
ビク
ハァ♥
「リ…リトの
は…入ちゃった……♥」

スリ
スリ♥

ララの発明品
『擬似擬似ちんぽくん』
女のコが装着すると
本物の男性器になる

ピピーッ
「男性器発見
しました」
ピコーン
ピコーン
ピコーン
「きゃっ
もう このカチューシャ
何なのーっ!」
「これより サービスを
開始致します」

「う… 動いてるーっ！」

クル

「かっ… 体が
勝手に…っ」

ピコーン

トッ

ピコーン

「わっ わっ
な… 何これっ…」

スタ スタ

ララの発明品
『これであなたも風俗嬢』カチューシャ
装着するだけで
プロの風俗嬢の
テクニックが身につく
レクチャーボイス機能付き

「…え…？」

「こ…これって」

「お… お…」

「おち… おち……っ」

「おち？」

ドクン

ドクン

（な…っ なんで
ララさんに… ついてるの～っ）

ウィィン…

『レッスン1 スタートします』

「手コキプレイ開始」

「ふあっ♥」

ビクッ

ビクッ

「きゃ…っ！」

「て…っ 手が勝手に動いてる…っ」

シュコッ

シュコッ

「ラ…っ ララさん…っ ごっ ごめんなさい…っ！」

「その…っ だっ 大事な所触わっちゃって…っ」

「い… 痛いよね…っ」

ゾク

ゾク

「あぁ…っ♥ あぁん…♥ 何… んあぁ…♥ この感覚う……っ♥」

ゾク

ビクッ

ビクッ

「春菜(はるな)ぁ… あぁん♥」

「そこ…ばっかり……んあっ♥ いじっちゃ…だめだよぉ…っ♥」

「ごめんなさいっ ごめんなさいっ」

「て…っ 手が勝手に動いてるの…っ！」

「もぉ…っ 止まってえ…っ！」

ガク

ガク

ニチュ

ニチュ

ニチュ

ニチュ

ニチュ

『お客様の反応良好…』
『続いてアナルを刺激します』
ズボ♥
ビクン♥
「ひゃあぁん…っ♥」
ゾク♥ ゾク♥
「は…春菜ぁ…っ
んあっ♥そこは…
あっ♥ だめぇ…っ♥」
「ごめんなさいっ
ごめんなさいっ
ごめんなさい…っ」
ニチュ
ニチュ
ヌリュ
ヌリュ

『フェラチオ開始』
『!』
レロン♥
『あぁぁん…っ♥』
ビク

「んーっ んーっ んー…っ」
(やだ…っ こ… こんなはしたない事…
お… お嫁にいけなくなちゃうよぉ…
もぉ… 誰か助けてぇ…っ)
「ん…っ♥ あぁ…っ♥
春菜ぁ… す… 凄いよぉ…♥」
「春菜の…あっ♥ 口の中… んっ♥
ぐちゅぐちゅしてて…♥ あっ♥
私のおちんちん… あぁっ♥ とろけちゃうぅぅ…っ♥」
ジュブッ
ジュリュッ
ヌリュ
ヌリュ
ガク
ガク

「男性器の最も敏感な箇所をピンポイントで刺激(強)します」
「はあぁぁん…っ♥」
「この時 乳首を舐めて刺激ポイントを増やしてあげるのもグッドです」
「さあ フィニッシュのイルン瞬間です」
「んん~っ♥ で…っ でちゃう~っ!♥」
「まだ手を緩めないように」
「射精を確認」
「勢いよく精液を発射しています」
「さあ、このまま射精へと導きましょう」
「んーっ んーっ」
「射精の兆しがみえてきました」
「あぁっ♥ もう らめ…っ らめぇ…っ♥」
「お… おかしく…あぁっ♥ なっちゃ…あぁんっ♥」
「あぁ…っ♥ な…何か出ちゃうぅ…♥」
「出ちゃうよぉ…っ♥」
「さらにペースをあげましょう」
「あぁぁぁ…っ!♥」
「あぁぁぁぁ~っ!♥」
「わっ!」

「わっ！　わっ！
まだ出てる…っ　止まんないよっ…」

『突然手コキを
止めないように注意してください』

『このあたりから
徐々にペースを
おとしていきましょう』

『殿方に至福の
時間を少しでも
長く味わっていただくため
ゆっくりと擦ってあげましょう』

ビクッ

ビクン

「殿方の射精が
終わりました」

「これで　レッスン終了です」

「おつかれさまでした」

ドキ

「はぁ…　はぁ…」

「やっと…開放された…」

「あ　こ…この白いのって
せ…精液……？」

「ふにゃあぁ～」

「もうだめ～…」

ハァ♥

ハァ♥

ビクッ

ビクン

ポロ

「こんなに
気持ちいいんだぁ
おちんちんって…」

ハァ♥

ハァ♥

「やみつきに
なっちゃうよぉ～♥」

「あれ…？」

「…春菜（はるな）……？」

「そうだっ」

「ねえっ」

「春菜もつけてみない？」

「うお…っ！」
「え…っ！」
「わ…っ？」
「まっ まじ…っ！」
「おお…っ♥ すげぇ」

（いやぁぁぁ…っ！）
「ふごぉ…っ」
「はっ 裸…っ！」
「うおーっ♥ チョーラッキー！」
「こらっ 何見てんのっ」
「うわぁ♥」
「おっ♥ しかもカワイイ♥」
「ごく…っ」
「だ 大胆なコ…」
（裸のまま 屋外に 出ちゃったーっ！）

（いやあー いやあー）
ピコーン
「男性器探索中…」
ピコーン
「男性器探索中…」
「ゆ 揺れてるっ♥」
「お宝ゲットぉ♥」
（みんな 見ないでーっ）
「わ……っ」
「すご…っ」

（え～ん）
（恥ずかしくて 死んじゃうよぉ…）
「ねぇ ねぇ オレらと遊ぼーよ♥」
「君 いくらならOK？」
「うおっ マジタイプ♥」

（こんな所 結城くんに見られたら…）

（あ…っ！）

タプン♡

ヤル♡

ヤルン♡

（私 もう生きていけない…っ）

（うちの学校の制服…っ！）

（こ 古手川さん…っ！）

（ゆ…っ 結城くん…っ！）

（うっ うそーっ！）

ミシ♡

ヤルン♡

（どっ どうしよう…っ！）

（やだ やだっ 止まってぇ…っ！）

（気づかれちゃうぅ…っ！）

（も…）

（もう だめぇ…）

カシャーン

!

「古手川（こてがわ）携帯落としたぞ」

「え…？」

「よっと」

「ほらっ」

「あ…っ ありがとうっ」

（た……）

（助かったぁ……）

シュッ シュッ
「え…？」
カチャ カチャ
ボロン

「きゃあぁーっ！」
「うお…っ」
「な…っ なんだぁ…っ」
（まっ また おちんちん～っ！）
学校

「っておい このコ まっぱだぜ♥」
ハァ ハァ
「おぉ ホントだぁ♥
って あっ あれ…っ 西連寺…っ！」
「さっ 猿山くん…っ！」
シコ シコ
ビクッ ビクッ

「は…？？」
シコ シコ シコ シコ
「へ…？」
スタ スタ

「はぁ…♥ はぁ…♥
こんなかわいいコに
手コキしてもらえるなんて
夢の様だぁ♥」

シュコ♥ シュコ♥ シュコ♥ シュコ♥

パルン♥ パルン♥

「はぁ…♥ はぁ…♥
さ… 西連寺が
こんな痴女だったなんて…♥」

(ち… 違…っ
私 痴女なんかじゃ…)

「へへ… リトには悪いが
い… いくとこまで
いっちまうか…♥」

「お おうっ いいなそれ…♥
そもそも このコの方から
してきたんだ…
せっ 責任取ってもらわねえとな…♥」

(ちっ 違うのっ
これはカチューシャのせいなの…っ
だっ だめ…
こ 怖くて…声が出ない……)

「はぁ…♥ はぁ…♥」

ハァ ハァ ハァ ハァ

「オレ… 女のコの裸
生で見るの…初めてなんだよなぁ…♥」

「そっ そんなのオレも
同じだよ…」

「はぁ…っ♥ はぁ…っ♥
さ… 西連寺
た たまんねえよ…♥」

「はぁ♥ はぁ♥
すげぇいい身体♥」

びく…っ!

(や……っ
だめぇ…っ)

「さ 西連寺
おっ おっぱい さっ触ってもいいよね?」

「…い……いや…」

(い… いや…っ
触られちゃう…っ)

(ゆ…結城(ゆうき)くん 助けて…)

ピピ～ッ！
『規定違反発生！』
ビクッ
「え…？」
「え…？」
『本人の承諾なしに身体に触れるのはNGですっ！』
『よって罰則として強制射精させて頂きます！』
シュッ
ジュッ
ズッ
ズッ
「おぐぅぅっ！」
「んぁ～っ！」
「あひぃぃっ！」
「っっ強…っ！」
『筋力増強モード突入！握力が3倍に上がりました』
『これにより超高速フェラ+手コキが可能となり通常の5倍の感度が男性器に襲いかかります！』
「ちっ ちんぽがもげる～っ！」
チュ
チュ
チュ
チュ
『さらに感度を跳ね上げます！』
『亀頭と小帯のみを激しくピンポイントで高速刺激します！』
「あぐぁぁっ！」
「いぎぃぃ～っ！」
チュッ
チュッ
「今まで味わった事のない快感地獄をとくとご堪能ください」
「あぁ～っ！ ぎぃぃ～っ！」
『射精の兆しがみえてきました』
ビクッ
ビクッ
「うぎぃぃーっ！」
『射精の際 さらに激しい快感が男性器に襲いかかりますのでご覚悟ください』
「精液が五袋を発射！イキます！」
シコッ
シコッ
シコ♡
シュコッ
シュコッ
シュコッ
「あぁぁぁっ！」
「あぱぁ」
「きゃぁぁっ！」
「身体を大きく仰け反らし奇声をあげながらの射精を確認」
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ビクーン
「ぬぐぁぁぁぁっ！」

「なお 強制射精モードは お客様の玉袋が空になるまで継続します」
「もっ もう出たって…っ!」
「さっ 西連寺…っ てっ 手を離して…っ!」
「えぇっ まだ続くの…っ?」
シコッ シコッ シコッ
ビクッ ビクッ ビクッ
「射精直後で敏感になっている男性器へインターバルなしで強い刺激を与えつづけると」
「あひぃっ…!もっ もう許してぇ…ひぁぁ…っ! くれぇ…っ!」
「脳が誤作動を起こし、本人の意思とは関係なしに何度も射精を繰り返します」
「これにより射精の際にともなう快感が長時間続きます」
「ぐぎぃぃっ! あがぁぁ…っ!」
「出しても だしても 終わらない射精とは 男性にとって二番の生き地獄です」
「精神崩壊にご注意ください」
ビュッ ビュッ ビュッ
ドクッ ドクッ ドクッ
「きゃあっ!」
「ひゃあんっ!」
「いひぃぁぁ…っ!」
ドクッ
(止まんない…っ)
(おちんちんの びくびくが 止まん ないよぉ…っ!)
「あぎゃぁぁ…っ!」
ドビュッ ドビュッ
「はぁ…」
「はぁ…」
(やっと 止まったぁ…)
(二人共… おちんちん勃ったまま 気絶しちゃった…)
ビクッ ビクッ ビクッ
(な なんか分かんないけど… 助かったみたい…)
(怖かったぁ…)
「へへ…お嬢ちゃん 最高だねぇ♥」
「っ!」

ゾロ
ゾロ
「ぶひぃぃ♥ は 裸ぁ♥ 女のコの裸だぁ…♥」
「オ オレも協力するよ♥」
「そんなに ちんぽ好きなら オレのも使ってくれよ」
「はぁ♥ はぁ♥ おおっぱいだぁ…♥」
「こっちも よろしく頼むよ」
「……っ！」
ドクン
ドクン
ビクン
ビクン
ビクン
(う… うそ……)
(い… いつの間に こんなに人が……っ)
to be continued.

「この話は オレがハーレム王になるまでの
全記録をおったものである…」

「まず そのきっかけとなったのが
発明少女ララちゃんから
盗み出したこの発明品である…」

保健室

「どうしたんですかぁ?」

たたっ

「こんな素敵空間(保健室)に
呼んでくださるなんて…」

ガラ

「失礼します…」

(きっ きっ)

(来たぁ…?!)

ボリ ボリ

「リトさん♥」

「い… いやぁ~
モ… モモちゃんと
二人きりに…
な…なりたくて…へへ…」

ララの発明品
クリソツくん
人の姿をそっくりそのまま
コピーする事ができる

「これで あの結城(ゆうき)リトに
なりすまして ひひひ…」

(へへへ… 成功だぁ
マジでオレの事が
結城(ゆうき)リトに見えてやがる…)

(あ あの憧れの
学園のアイドルモモちゃん
とオレは今 話をしている)

(あぁ… モモちゃん
なんてかわいいんだぁ…♥

ドキ ドキ

「わ 私と二人きりに
なりたいだなんて…♥」

(きゃぁぁ♥ どうしようっ
いきなりキスとかされちゃったりして~♥
な~んて リトさんに限ってそんな事ないよね
残念だけど…)

（透きとおるような綺麗な肌…♥）
（ぷるっぷるっの唇…♥）
（甘くていい香り…♥）
（もっ もう耐えられん…っ！）
「モモちゃんのファーストキス…」
「え…？」

いただきぃ…っ♥！
ブチュッ
キュン
！
「んん……っ！」

（やったっ やったぞ…っ！
モモちゃんの唇奪ってやったぜぇ…♥）
（柔らけえぇ…♥
何だよこの感触…♥
これが女のコの唇…♥）
チュルチュル「ん…♥」
「んん…♥」
（か… 身体だって
触っちゃうもんね…♥）
（細ぇ… 女のコの身体って
こんなに細いのかよ…♥）
ビク ビク
さわさわ

（そして…）
チラ
巨大マシュマロ
ゲットォッ♥！
モミュ
モミュ
「あぁぁんっ♥」

おっぱいっ♥ おっぱいっ♥ おっぱいっ♥
プルン
ムニュ
ビクン
「ひゃあぁんっ♥」

（ぜ 全然抵抗しねぇ…♥
マジかよ…結城リトの奴…
こんな毎日がハーレム環境でありながら
何にもしねぇなんて
マジありえねえぇ…）
クリ
「あぁ…♥」
ビク
「はあぁん…♥」
ビク
（これからは
オレが結城リトだぁ…
フナチン野郎に成り代わって
オレがハーレムを築いてやるぜぇ…♥）

「きゃ…っ」
ドサッ
「リ……」
「リトさん……？」
（だ…ダメ…キスされてから…頭がぼーっとしちゃってる…）
（あのキスの意味は…？私…リトさんの側室に選ばれたって事…？）
（それに…今日のリトさん…すごい積極的…♥まるで…別人みたいに…）
「そっ その 瞳は OKって事だね り了解したよ ひひ…♥」
「お…おおぉ……♥」
ジュク
クイ
レロ♥
「リっ リトさん…っ！ な 何を…っ」
「きゃあっ…！」
ドクン
ドクン
「リっ リトさんっ まさか これって…？！」
「そうだよ♥ その…」
ビクン
チチュ
「あぁっ…！だめですっ まっ 待ってく…」
ズチュン！
「まさかだぁ…っ♥！」
プルン
ビクン!!
「ひゃあぁぁぁぁぁぁんっ！」

（くぅおぉぉっ！あいつ結城リトより先にモモちゃんの処女奪ってやったぜぇっ♥）
（とうだぁ…っ！ざまぁみやがれ…っ！）
「あぁんっ♥」
（オレは日頃からあいつを憎んでいたんだ…っ！）
「はあぁんっ♥」
（いつもいつもかわいい女子達といちゃいちゃしやがってぇ…っ！）
「んんっ♥」
「あぁあんっ♥」
（学園の美少女ランキングトップ10の女子を全て独占だとぉ…っ！ふざけやがってぇぇ…っ！）
（おまけに あのデビルーク3姉妹と同じ屋根の下だぁ…っ？そんな事が許されてたまるかぁ…っ！）
「あぁんっ♥」
（奪ってやるぜぇ…っ！あいつの人生っあいつの周りの女子達をっ！）
「んあっ♥」
「あんっ♥」
（そして あいつの前に女子達全員並べて犯しまくってやるぜぇっ♥！）
「んんっ♥」
「はっ♥」
「まずは…モモちゃんに種付けだぁっ！」
「モモちゃんにオレの子を孕ませてやるぅ…！」
「ひゃあんっ♥」
「あぁっ♥」
「そ それは…あぁっ♥だっ だめですっ！」
「んあぁっ♥」
「リっ リトさんが私を…あぁん♥ 側室として認めてもらうまではぁ…っ！」
「側室ぅ？ああ いいぜえもちゃんをオレの側室にしてやるよっ♥」
「！」
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
バコッ
バコッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
プルッ
プル
ギシッ
ギシッ
ギシッ
ギシッ

「くぅぅぁぁっ！」
ドピュッ
「おぉぉっ！すっげぇ出るぜぇっ！」
「ひゃぁぁぁんっ♥♥！」
ビュルルッ
ピュッ
ピュッ
ビュー
「あぁぁっ♥♥」
「出てますっ♥リトさんの子種…っ私の膣内(なか)にいいっ♥♥」
ビクッ
ビクッ
ガクガク
「オレの精液でモモちゃんの膣内いっぱいにしてあげるねっ！」
「凄おいい…っ♥！溢れちゃうぅ♥リトさんの子種で私あふれちゃいますぅっ♥♥」
ビクッ♥
ビクッ♥
「あぁ…っ♥」
「んっ…♥」
ドパァ
「んん…っ♥」
「んふぁ…♥」
レロ♥
レロ♥
ビクッ♥
（こ これ…ホントにできちゃたかも…♥）
（今日…危ない日だったし…）
（…でも…… いいの…♥）
（だって… リトさんが私の事…側室に選んでくれたんだもん…♥）
「はぁん…♥」
「ひひひ… まずは二人目…♥」
ハァ
ハァ
「どんどんいくぜぇ♪」
（あいつ 結城リトの周りの女子達は全てオレ様のモンだぁ！）
「リトさん 私… 嬉しいです…♥リトさんが『ハーレム王への道』を選んでくれて…♥」
「ハーレム王？ひひひ… いいなそれ♪」
「よぉし 片っ端から犯って 犯って 犯りまくってやるぜぇ♥」
「リトさん…それでしたら私いいアイテムがありますよ…♥」
つづく…

「あぁ…♥」
「はぁん…♥」
「ひひ… 里紗ちゃん もういいよね？」
「ゆ 結城い だめだって…♥ あたし…春菜を裏切れないよぉ…」
「オレにここまでされて おいて今更かよ」
「そ… それは…その…」
ゾクゾク
ムニュ
グチュ
（おまけに 精力倍増『バイアグ蘭』の効能のおかげで いくらでも犯りまくれるぜぇ♥」
セリーヌの花粉EX
この花粉を浴びると リトに対して 激しく発情してしまう♥
（モモちゃんからもらった『セリーヌの花粉EX』 すげぇ効き目だぜぇ）
レロ
レロ
「嬉しい♥」
「ああ」
「あたしも 結城の事 ずっと好きだったんだよ♥」
（はい おちましたっと♥）
「ほ ほんとに…？」
「え… う うそ…」
「実はオレ 春菜ちゃんよりも 里紗ちゃんの事が好きだったんだ」
（めんどくせぇ 女だぜ まぁ 一応 ベタな殺し文句ぐらいは 言っておいてやるかぁ）
「あぁんっ♥♥」
「あぁんっ♥」
「あぁんっ♥」
「んあぁっ♥」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ガタッ
ガタッ
「あたしぃ… あぁんっ♥ は… 初めてなのにぃ んっ♥ 感じまくってるぅ♥♥」
（この女 遊んでるように みえて処女だったのかよ♥ ひひ… 得したぜ…♥）
チリュッ
ブリュッ
ズリュッ
「さっそく膣内 自由に使わせてもらうぜぇっ！」
「おらぁ オレ様の精液だぁっ！ たっぷり受け取れぇっ！」
ゾクッ
ゾクッ
プルン♥
プルン♥
「あ あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ♥♥♥♥♥♥」
「はいはい わかってるよぉ♪ オレも未央ちゃんの事 大好きだよぉ」
「うっ 嬉しいっ♥ あぁっ♥ 結城い んあぁっ♥ 私の事ぉ… もっと…んっ♥ 好きにしていいよぉ…♥」
ビクッ
ビクッ
プルン
プルン
「あぁんっ♥」
「ゆ 結城い♥」
「私も… はぁんっ♥ 結城の事 んっ♥ 好き… あぁっ♥ だったんだからぁ…♥」
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
「ひひひ…了解い！」
ビクッ
ビクッ
「はぁ…」
（ふぅ 準備運動終わりいっと♪）
「はぁ…」
（ひひひ…次はあの お嬢様にするか…♥）

『ゆ 結城リトさまぁっ♥ あぁんっ♥ もっとぉっ♥ もっと突いてくださいぃっ♥』
『あんっ♥』
『んっ♥』
ズッ
ズッ
ブルッ
ズッ
ズッ
「もっとして欲しかったらオレ様の奴隷になれぇっ！」
「お前は今日からオレの奴隷だぁぁ わかったかぁっ！」
「はいっ♥ あんっ♥ と…奴隷ですぅ わたくしは…んっ♥ たった今から はぁん♥ あなたさまの奴隷ですぅ♥♥」
(ひひひ… お高くとまったお嬢様を屈服させてやったぜぇっ！)
「いい気分だぜぇっ あの天条院財閥の沙姫お嬢様 がなんてザマだぁっ！」
「おらぁっ！ もっと鳴いてみせろ このメス豚がぁっ」
「あぁんっ♥」
「しゅごいぃぃ♥」
「あはぁっ♥」
ガクッ
ガクッ
ガタッ
ガタッ
ドッ
ポッ
ドチュッ
「あひいいいんっ♥♥」
「うおっ！ やべもう出るっ！」
「きゃあぁぁっ！ 沙姫様ぁ！」
「くらえっ！」
プシュー
セリーヌ花粉
「セリーヌの花粉EXスプレー！」
「ひひ… 待ってたぜ」
ニヤリ
「何っ？！」
「おのれ 結城リトっ！ 沙姫様から離れろぉっ！」
バッ
バッ
「はあぁん♥ なっ 何故だっ 君を見てると あぁん♥ あ 熱くなってぇ んっ♥ て 抵抗できないぃ♥」
バルン
ボイン
「あんっ♥」
「あっ♥」
ズッ
ブチュッ
ドチュッ
「九条せんぱい オレに惚れちまったんじゃないっすかぁ」
「な 何を馬鹿な…っ 私が… あぁん♥ 恋など… んっ♥ するはずがない…っ♥」
「何なら 付き合ってやっても いいっすよ？」
「何…っ！ そ… それは…ほ 本当…なのか…？」
「う… 嘘なら ゆ 許さんぞ…」
「はい マジっす」
「な なら… 私はもう…あんっ♥ 君のものだ… 好きにしろ…♥」
「ひひ やったぜぇ♥」
「藤崎せんぱいっ 今まで抱いた女子の中で 一番柔らかいっす♥」
「おしりの肉感なんか たまんないっすよぉっ♥！」
ドッ
ドッ
「ほ 本当？ あぁん♥ 嬉しいぃ♥ も もっと…しても…んあっ♥ いいのよ… 結城くんの…あっ♥ やりたいようにして…いいからぁ♥♥」
「それじゃあ お言葉に甘えてっ♥」
ビクッ
ビクッ
「膣内出しだあぁっ！」
「ひゃあぁぁあんっ♥♥」
「ひゃあぁぁあんっ♥♥」
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ

「リトくん〜んっ♥♥」
「あぁんっ♥」
「やっと… やっと リトくんと ひとつになれたぁ♥♥」
「こ これ… ホントに私今 リトくんと Hしてるんだよねっ? 夢じゃないよねっ♥♥」
「ああ もちろん現実だよ ルンちゃん♥」
「リトくんの おちんちんっ♥♥」
「おちんちんぇっ♥」
「んっ♥」
「う 嬉しい…っ♥」
「ララちゃんごめんねっ でも リトくんが私の事選んでくれたのぉっ♥」
「あっ♥」
「あはぁっ♥」
「やだっ こっ こんな はしたない姿… あっ♥ リトくんに んっ♥ みせたくないのに…っ♥」
「こ 腰がぁ 勝手に 動いちゃうのぉ…っ♥」
「ほんと? じゃあ…私 あんっ♥ んっ♥ もっと もっと あんっ♥ Hな女のコになるねっ♥」
「おぉうっ♥ ひひ… た 堪んないよ ルンちゃんエロすぎ♥」
「オレ エッチな女の子大好きなんだぁ♥」
「わ わらひも リトさんのために がんばりまふ♥」
「あぁっ♥」
「リっ リトさん 凄いですぅ♥ こ これが せっくすという ものなのですねっ♥」
「んっ♥」
「ひぃっ♥」
「ひゃんっ♥」
「リトさんのおちんちんが 出たり入ったり する度に 私の身体に稲妻が 走りますぅっ♥♥」
「ひひ… お静ちゃん それじゃあ さっそく始めようか?」
「はっ はい! ふつつかもの 不束者ですが よろしくお願いします?」
「あぁんっ♥」
「わ 私 一番じゃなくても いいですからぁ… 春菜ちゃんの次でも ルンちゃんの 次でもいいですからぁ リトさん っ… 私の事… 好きになって ください♥」
「ひひ… もちろんOKだよ♪ お静ちゃんも 他の女のコ達も みんなまとめて愛してあげるからね♥」
「あっ ありがとうございますぅっ♥♥」
「みんなで オレのコを 孕んでくれぇぇぇっ♥♥!」
「あぁぁぁぁんっ♥♥」
「ひゃぁぁぁぁぁんっ♥♥♥」
「わっ私 絶対 リトくんの子供産むからぁっ♥」
ズチュッ
ヌチュッ
ドチュッ
レロ レロ
ズリュッ
ズポッ
ズチュッ
ドピュッ
ビュルッ
ビュッ
ビクッ
ビクッ
ビク

モジ「リ…リト ちょっと…いいか…？」
モジ
『！』
「その…わ…私の…あそこが…熱いんだ…」
ピシッ♥
きゅん♥
きゅん♥
ドキッ
「だ…だから…えっと その…リ…リトの…お おちんちんで…た…助けてくれ…♥」
ドキッ
「だ そうですよ？リトさん♥」
「ひひ…」
「了解～♥」
ハァ ハァ
「あぁんっ♥」
「双子でも アソコの形が違うんだねぇ♥」
「はぁんっ♥」
「ナナちゃんの アソコ すごく狭くてきついよぉっ♥！」
「ひぃんっ♥」
はぁっ
はぁっ
「な…っ あぁん♥ 今 モモと比べただろっ！ んっ♥ デ デリカシーのない奴っ！」
「リ 今は私の事だけ んあっ♥ かっ 考えてればいいんだっ あんっ♥ このばかリトぉ♥」
ビクッ♥
ビクッ♥
「んあっ♥」
「んっ♥」
「ひひ… ごめんよ ナナちゃん お詫びにもっと 気持ちいいことしてあげるね♥」
ズリュッ
ブチュッ
ブチュッ
「あぁぁぁあんっ♥♥」
（なっ 何だよこれぇっ♥ 全身のビリビリが 止まんないよぉっ♥）
「んあぁぁぁっ♥」
ゾクッ♥
ゾクッ♥
「ふふ… 大声出しちゃって…♥ よほど リトさんと私に されるのが気持ちいいのね♥」
レロ
レロ
「んんーっ♥♥」
ビクッ
ビクッ
ミシッ
ミシッ
「しっぽまで 同時にこしこしされちゃったら ナナの精神 ほんとにふっとんじゃうかもね♥」
「でも ハーレム王であるリトさんの 命令は絶対なの ごめんねナナ♥」
「んんーっ♥♥」
ブチュッ
ズチュッ
（きっ 気持ちよすぎて おかしくなっちゃうぅっ♥）
「ひゃぁぁぁあんっ♥」
クリ
クリ
ズリュ
「いくよぉっ ナナちゃんっ♥！」
「ぼっ 膣内は…だめぇっ！」
ズリュ
「くぅぉぁぁっ！」
ドピュッ
「ひゃぁぁぁんっ♥♥」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュー
ビュル
「ぼっ ぼんとに だすなぁぁっ♥」
「ごめんよっ あまりに気持ちよすぎてっ ちゃんと責任は取るからっ」
「！」
「ぜっ 絶対だなっ なっ なら私と 結婚しろぉっ♥」
「ひひ… いいよ♪」
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「伝わってくるよ…っ♥」
「ヤミお姉ちゃんの えっちい気分♥」
「あぁんっ♥」
「せんぱいのおちんちんの形い♥」
「ヤミお姉ちゃんの感覚は 髪を通して 全部私に流れこんでくるのっ♥」
「はぁんっ♥」
「んっ♥」
「いいっ♥」
「はぁんっ♥」
「あぁんっ♥」
「くっ 黒咲 芽亜…っ どっ どうしてこんな…あぁっ♥」
「んあっ♥」
「んっ♥」
「私いモモちゃんのハーレム計画に賛成なんだぁ♥」
「だからさぁ せんぱいにハーレム王になってもらってぇ みんなでいっぱいえっちいコトたくさんしようよ♥」
「わっ 私はえっちいのはキライですっ」
「ゆ 結城 リトの事だって…っ」
「あぁんっ♥」
「んっ♥」
「はぁんっ♥」
「あぁんっ♥」
「んっ♥」
「嘘ばっかりぃ 今ヤミお姉ちゃんの 頭の中は せんぱいでいっぱいのくせにぃっ♥」
「あんっ♥」
「私が代わりに 声に出してあげるっ♥」
「だっ 駄目ですっ!」
「結城 リトの おちんちん どうして こんなに気持ちいいのぉっ♥」
「もっと もっと 奥まで突いて欲しいっ♥」
「根元まで 全部 入れて欲しいっ♥」
「えっちいこと いっぱいして欲しいっ♥」
「もう 結城 リトのおちんちん 以外何もいらないっ♥」
「ひひひ… 嬉しいよ ヤミちゃん そんなにオレの チンポがいいんだね?」
「…そっ それは…っ!」
「それじゃあ コレも受け取ってよっ♥」
「んっ♥」
「あんっ♥」
「んあっ♥」
「濃厚ミルクを下の口で 飲んでくれぇぇっ!」
「うぎいい…っ」
「オレのぉぉ…」
「あぁ♥ 熱いのが入ってくるぅ…♥」
「私も…いっくぅぅっ♥」
「あぁぁ♥ぁぁぁぁっ♥♥」
「だいぶ 女子を 犯してやったが……」
ひひ…
「まだだぁ まだ終わってねぇ…」
「確か 結城には 妹がいたな…」
ハァ ハァ
To be continued